

KŌBŌYAMA-KOFUN

弘法山古墳出土遺物の再整理

—新発見資料を中心とした土器とガラス製小玉の整理—

1993・3

松本市教育委員会

KŌBŌYAMA-KOFUN

弘法山古墳出土遺物の再整理

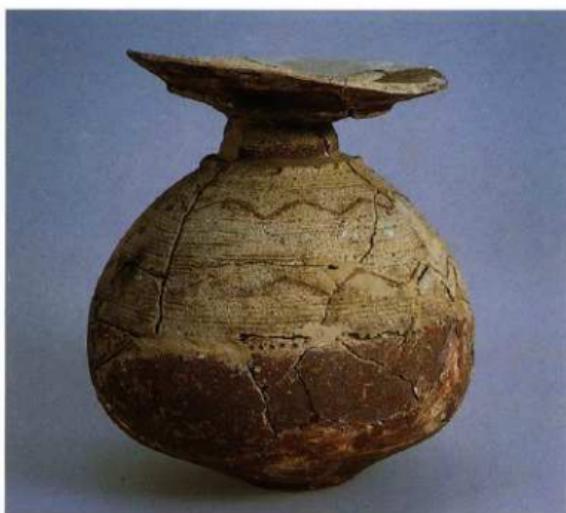
—新発見資料を中心とした土器とガラス製小玉の整理—

1993・3

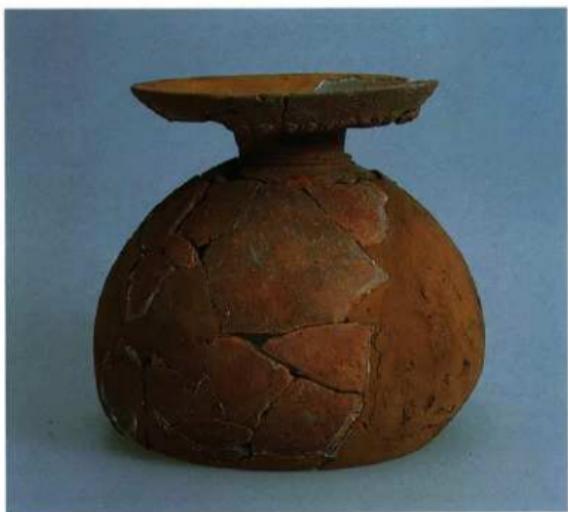
松本市教育委員会



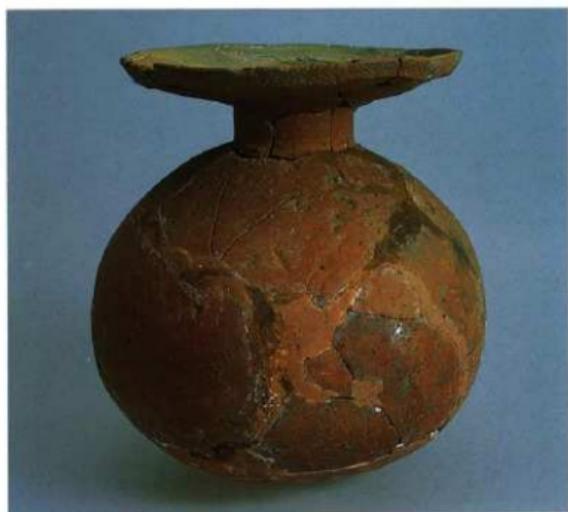
壺A（第3図1）口縁部上面



壺A（同上）



壺B（第3図2）



壺B（第3図3）



壺C（第3図5）口縁部上面



壺C（同上）口縁部下面



高杯A（第4図1）



高杯C（第4図6）



高杯B（第4図3）



高杯B（第4図4）



小型高杯A（第5図2）



小型高杯B（第5図4）



壺B（第3図4）頭部破片



小型高杯B（第5図5）



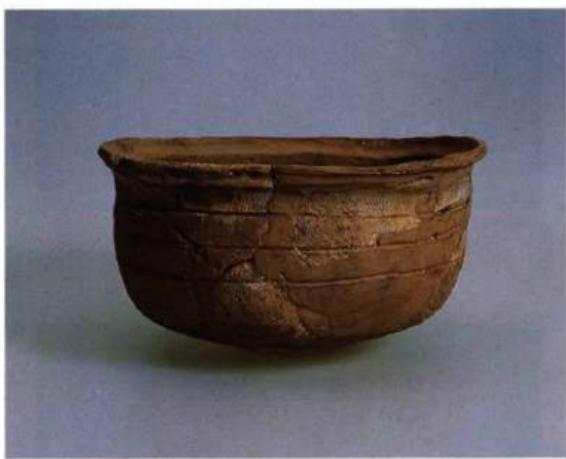
小型高杯B（第5図3）部分



手焙形土器（第5図10）面部表



同左 面部裏



手焙形土器（同上）鉢部

序

松本市の東に連なる中山丘陵の北端に築かれた弘法山古墳は、昭和49年に発掘調査が行われ、その結果、西暦4世紀の中頃に遡る古式の前方後方墳であることが判明しました。長野県下では最古の古墳であり、東日本でも非常に古いといわれる古墳が、私たちの松本市から発見されたことは、当時、大変な驚きであったとともに誇りでもあったことを、今でも鮮明に記憶しております。

当初、弘法山古墳は、開発事業のため発掘終了の後に破壊される運命がありました。しかし発掘成果が示す、古墳の学術的な重要性は極めて高く、地域の歴史を解明していく上でも、かけがえのない文化財であることが正しく認識されると、学術関係者のみならず市民の間からも保存を望む声が澎湃としてあがったのもうなづけるところです。幸いなことに、弘法山古墳は昭和51年2月20日付で国の史跡に指定され、また古墳を含む一帯も市有地となって破壊を免れ、完全に保存することができました。これは発掘調査に携わった方々の熱意や、国、県関係当局のご協力、当時の地権者であった松商学園のご理解の賜物であります。当時を振り返り、関係者各位のご尽力に改めて敬意を表する次第です。

発掘調査報告書の刊行は昭和53年で、これにより弘法山古墳の学術上の評価も定まったのですが、その際には、齊藤調査団長、大塚・小林調査委員の先生方には大変なご苦労をおかけいたしました。ところがそれから10年を経過した昭和62年になって、当初の発掘調査で出土していながら、先生方の目に触れずに未整理のままで遺されていた遺物があることが判明し、大きな問題となりました。その経緯については、本文中で詳しく述べているとおりです。松本市教育委員会ではこのような事態が生じた責任を痛感し、また弘法山古墳の学術的な重要性を鑑みて、事の経過を明らかにするとともに、未整理であった遺物の内容を周知させることにいたしました。このように、いささか残念な状況によって刊行されることとなった本書ではありますが、弘法山古墳の理解をさらに深める一助となるならばせめてもの教いと申せましょう。

最後になりましたが、本書作成にあたり、多大なご迷惑をおかけしたにもかかわらず、ご寛恕とご指導をいただいた、齊藤忠、大塚初重、小林三郎の三先生に心から謝意を表します。

平成5年3月31日

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

例　　言

1. 本書は、長野県松本市大字出川丸山1000番地に所在する弘法山古墳から出土した土器、および一部のガラス製小玉について整理を行った結果の報告書である。今回の整理および本書の作成は、(財)松本市教育文化振興財団が、松本市教育委員会から委託を受けて行った。
2. 弘法山古墳については、松本市教育委員会によって昭和49年に発掘調査が行われ、昭和53年には正式な発掘調査報告書も刊行されている。しかし、本文第1章に述べる経緯により、若干の土器とガラス製小玉の未整理品が遺されたため、今回の整理が行われた。なお、本文中で用いた「報告書」の語は、すべて昭和53年に刊行された発掘調査報告書のことを指している。
3. 遺物の性質上、ガラス製小玉については未整理品のみを扱ったが、土器は接合等の関係から、既報品も含めて整理を行った。また、松商学園高校が所蔵していた土器についても、平成4年に同校より松本市へ寄贈がなされたので、あわせて整理を行った。
4. 整理の実施にあたり、報告書の土器とガラス製小玉の執筆者であった、大塚初重氏(明治大学文学部教授:土器)、小林三郎氏(明治大学文学部教授:玉類)の指導と教示を得た。
5. 本書の執筆は、第1章:神沢昌二郎、第2章3節:関沢聰、その他は直井雅尚が行った。
6. 赤色顔料の鑑定は、森義直氏(松本深志高校講師)を煩わせた。
7. 本書作成の分担は次の通り。

土器接合	五十嵐周子	滝沢智恵子
玉類整理	林和子	
土器実測	直井雅尚	
写真撮影	土器・玉類:宮嶋洋一	玉類顕微鏡写真:関沢聰
企画・編集	直井雅尚	
8. 本書の作成にあたり、次の方々から有益なご教示、ご協力を賜った。記して感謝する。

青木和明	青木一男	岩崎卓也	宇賀神誠司	山下誠一	吉沢克彦
------	------	------	-------	------	------
9. 今回、整理を実施した遺物とそれらの実測図類は、既報告品とともに松本市立考古博物館(松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)が保管している。

目 次

序

例 言

目 次 1

図目次 1

第1章 これまでの経緯 3

第2章 遺物各説

第1節 出土遺物と整理の概要 6

第2節 土器

1. 出土土器の概要 7

2. 土器各説 8

3. 色調・焼成より見た土器群 17

4. 弘法山古墳出土土器の編年的位置 18

第3節 ガラス製小玉 22

第4節 赤色顔料 26

第3章 まとめと課題 26

図 目 次

第1図 弘法山古墳の位置 2

第2図 弘法山古墳の墳丘 4

第3図 出土土器(1) 14

第4図 出土土器(2) 15

第5図 出土土器(3) 16

第6図 器種・器形の時期比定 20



1:50,000 松本

白丸は中山36号墳

1000 1000 2000 3000

第1図 弘法山古墳の位置

第1章 これまでの経緯

はじめに

弘法山古墳の発掘調査報告書は斎藤忠先生を編纂代表者として、松本市教育委員会によって昭和53年6月に刊行されているが、今回本報告書を発刊するのは、市教育委員会のミスにより、出土遺物の一部が執筆担当の先生がたの目に触れないままであったことが判明したからである。ここに団長斎藤忠先生はじめ担当の大塚初重・小林三郎先生、発掘・整理に係わった関係の方がたや、古墳研究者にご迷惑をかけたことをお詫びするとともに、改めて弘法山古墳の資料として報告するものである。

1. 発掘調査の概要

(『弘法山古墳発掘調査報告書』を主とし、ほかに『長野県埋蔵文化財白書』長野県考古学会誌特別号1981小松慶氏報告「松本市弘法山古墳」を参照)

学校法人松商学園は校地造成のため弘法山一帯を入手したが、その地に塚らしいものがあるので現地調査をすることとなり、昭和49年3月22日、日本民俗資料館（松本市立博物館）主事の小松慶氏と学園の宮城浩事務局長とで現地踏査の結果、古墳に間違なく緊急発掘調査をすることになった。そのため調査団の編成をした。調査責任者小松慶氏、調査員倉科明正・西沢寿晃氏ほか。

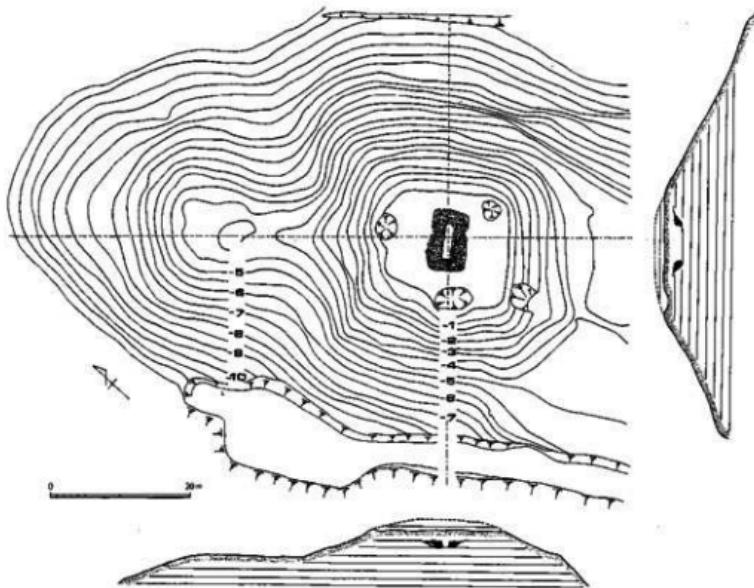
同年4月中旬より松商学園により発掘範囲の樹木伐採、測量調査。4月20日、墳頂部より発掘調査開始。4月22日には墳頂部で礫列の全容がわかる。4月24日にはほぼ伐採終了。前方部を持つ古墳かどうかの判断がせられる。4月27日、発掘中止。出土遺物は松商学園で保管（小松氏は4月20日～27日を第一次調査としている）5月10日、調査体制の立直し、指導を斎藤忠氏に依頼するなど話し合い。

5月13日～19日、松商学園調査再開、墳丘実測作業。小円墳調査などを行う。出土遺物松商学園に保管。（小松氏はこの間を第二次調査としている）5月17日、斎藤忠氏現場視察。古式古墳で重要な古墳と確認。県的調査体制に新編成。松本市教育委員会が発掘主体となる。顧問一志茂樹氏、調査団長斎藤忠氏、副団長原嘉藤氏、調査委員大塚初重・米山一政氏ほか。

5月24日、調査団結団式。ただちに発掘調査にはいる。墳頂石列取りはずし。5月27日、礫層中心部より土師器の破片が多数出土。6月8日、石室内より鏡等出土。墳形も前方後方墳で、信濃の古代史を変える重要な古墳となる。出土遺物は日本民俗資料館で保管。6月16日、第一次調査終了（小松氏は5月24日～6月16日を第三次調査としている）

（以下古墳の保存関係の動向は割愛）

9月28日～10月、主体部埋め戻し作業。50年1月23日～1月28日、墳丘実測作業実施。



第2図 弘法山古墳の墳丘(吉藤他1978)

2. 遺物整理の経過

発掘調査の主体が松本市教育委員会となってからは、出土遺物は日本民俗資料館へ搬入し、それともとして、第一次遺物整理は昭和49年9月16日～21日の間、第二次遺物整理は昭和50年3月16日～20日の間、とともに日本民俗資料館において大塚初重委員ほかにより実施された。報告書取り上げ資料については、土器・鉄器等各担当の先生がたにより研究室へ持ちかえり、報告書作成が進められた。昭和53年3月、青銅器・鉄器等奈良元興寺文化財研究所により処理完了。昭和53年6月、発掘報告書上梓。

3. 未報告資料の発見とその後の経過および今後の方針

昭和62年4月、松本市教育委員会社会教育課フロアより、ダンボール箱に入った未洗浄の遺物を発見。内容は土器片、ガラス小玉、朱のついた土と石などである。ビニール袋に記載された注記により昭和49年5月24日以降のものと判明する。その後土器を洗浄し、既出資料との比較やガラス小玉点検等を行った。その結果弘法山古墳には欠かせない貴重な資料と判明した。

事態を重視した市教育委員会はミス発生の原因調査に入ったが、当時副団長として外部折衝を主に担当していた原嘉藤氏は昭和58年に逝去され、地元として現場の中心的活動をしていた小松慶氏も昭和54年5月に交通事故死しており、詳しい事情を知る術もなかった。一方当時の事務局担当者も当然遺物保管場所にあるべきものと思っていたとのことで、事態解明にはいたらなかった。しかし事態は明らかに教育委員会の遺物管理が社説だったことに起因しており、保管場所である日本民俗資料館への運搬過程で、一旦教育委員会事務局に置き、そのまま忘れ去られてしまったものと推定する。

このことは団長の斎藤忠先生はじめ、遺物担当の大塚初重・小林三郎先生には不完全な資料で報告書執筆をお願いしたことになり、多大なご迷惑をおかけしたことを改めてお詫びする次第である。先生がたにはなんら非ではなく、一切は市教育委員会の責任である。

また遺物発見後の処置についても、関係諸方面への連絡の遅れや、一般公開の方法などに適切さを欠いたことをについても反省している。あまりにも突然の発見や、遺物の持つ重大さに動転し対処を遅らせたことが、結果として先生がたに非礼をいたしたこととなった。この点についても重ねてお詫び申し上げる。

今回発見の遺物の扱いであるが、昭和53年刊行の報告書の遺物と一緒にになって弘法山古墳出土土器として完全なセットを作成するという理解に基づけば、報告書刊行と同様、大塚・小林両先生にお願いするのが筋道であろうと思われたが、平成4年3月に市教育委員会職員が上京して斎藤・大塚・小林先生にこれまでの経過を説明し、今後の方針について指導をうけた際、未整理遺物については大塚・小林両先生のご指導のもと、市教育委員会が整理を行うということでご了解をいただいた。幸いにも弘法山古墳出土品が一括県宝指定の候補物件になっており、これを機会に報告済みの資料も含めて再整理を行うべく作業を実施した。

なお松商学園が発掘調査し保管していた出土遺物は、松商学園のご好意により松本市が平成4年12月に寄贈を受け、一括管理をすることになった。そのためこの資料も併せて整理した。

第2章 遺物各説

第1節 出土遺物と整理の概要

今回、発見された未報告の遺物は、土器とガラス製小玉が主体で、他に少量の赤色顔料を含む土塊が伴っている。点数は土器が352片、ガラス製小玉は257点と破片15片である。これに、既に報告済の、松商学園高校が所蔵していた土器104片および、松本市教育委員会保管分の土器621片、ガラス製小玉481点と若干の破片を含めると、弘法山古墳から出土した遺物のうち、土器は総数937片、ガラス製小玉は738点と破片若干という数字になった。

今回の整理は、この未報告遺物について行うのが主な目的であった。整理内容の詳細は各節で触れているが、土器については接合関係の問題があり、既報告品と松商学園高校所蔵品を含めた整理が求められた。⁽¹⁾幸いなことに、松商学園高校のご好意により、同校所蔵品が平成4年に松本市に寄贈され、すべての土器を一括して整理することが可能となった。その結果、不明であった同一個体の接合部分も判明し、24点の土器が図化・復元されて、当古墳出土土器の内容をさらに充実させることができた。

これらを含めた、弘法山古墳出土遺物の全容は次のとおりとなる。土器と玉類を除く、他の遺物の種別と数量は、発掘調査報告書の見解によっている。

表 弘法山古墳出土遺物の内容と数量

種 別	細 別 と 数 量
金 属 製 品	半三角縁四獸紋鏡1 鉄斧1、鉄劍3、銅鎌1、鉄鎌24、鉗1
玉 類	ガラス製小玉738（推定750以上）
土 器	土師器破片等937（うち接合、図化復元できた個体24）
赤 色 顔 料	*分析の結果、成分は水銀朱

第2節 土 器

1. 出土土器の概要

1978年に刊行された発掘調査報告書（以下、報告書と略す）には、その概要が次のように記されている（大塚1978：59～62頁）。

弘法山古墳で発見された土師器は、そのほとんどが後方部墳頂で出土したものである。すなわち内部構造である竪穴式石室の直上にあたる位置に集中していたが、（中略）合計621個の土師器片が出土した。これらの土師器片は全般的に焼成が不良で、かつ表面の剥落が著しく、しかも細片となっているため復原は困難である。（中略）昭和49年4月における松商学園の調査の中にも若干の土師器資料が出土し、現在同校に保管中である。松商学園にある弘法山古墳出土の土師器片は総数104片であり、その多くは後方部墳頂の地表面下20～30cmのレベルで発見されている。（中略）第一次の松商学園による調査の際に発見された土師器片は、第二次の松本市による調査の出土土器と一括遺物としてとらえるべきものと判断する。いま第一次と第二次調査の出土資料を合計すると、総数725片となり、弘法山古墳の後方部上に埋置された土師器の数量はかなりのものであったと推定される。2回の整理を通じて確認された数量は次の如くである。

壺形土器 4個以上（丹塗例1個を含む）	器台形土器 2個以上（丹後例1個を含む）
壺形土器 1個以上	高杯形土器 10個以上（丹塗例2個を含む）
壺形土器 1個以上	碗形土器 1個

右の器種と数量は明確に確認されたもののみであり、合計19個以上、おそらく細片となっている破片の数量から推測すれば、30個近い土器が後方部墳頂に存在したと考えられる。

今回の整理では、新報告の資料が土器352片（縄文・弥生土器片を含む）で、これに既出品を加えると総数では973片となる。ただし、既出品の中には調査後10年以上の歳月を経てさらに細片となったり風化壊滅してしまったものもあり、数え上げられた破片数の一割前後は異同があろう。確認された器種は、壺形土器（以後、手焙形土器を除き○○形土器は略す）・高杯・小型高杯・手焙形土器の5種で、さらに壺はA～Dの4類に、高杯は3類、小型高杯2類に分類される。報告書に倣い、実測図化の可不可にかかわらず器種毎の推定個体数を挙げると次の通り。

- 壺A：1、壺B：2、壺C：3、壺D：2（ただし壺C・Dは破片のみの可能性大）
- 高杯A：2、高杯B：3以上、高杯C：1
- 小型高杯A：1、小型高杯B：5以上
- 手焙形土器：1

2. 土器各説

実測図(第3～5図)に示した土器はすべて今回、再実測を行ったものである。これらを中心に、器種・器形・個体毎に説明を加える。合わせて報告書刊行後の異同や新知見⁽²⁾があるものにも言及したい。

(1) 壺

外形の違いからA～Dの4類に分けられる。この分類は色調・焼成や紋様構成の違いにもほぼ対応する。

①壺A

第3図1 この1個体のみ。報告書61頁23図1に相当する。口縁部と胴下部1/3、底部外周1/5程を欠くが完形に復元され、摩滅などにより接合できなかった小片が数点残っただけである。高さ20.3cm、口径14.6cm、胴部最大径18.9cm、底径4.6cmを測り、底部はおそらく焼成後に穿孔されている。外形の特徴は、やや下ぶくれの胴部、内湾・内傾気味の短い頸部と直線的に大きく開き端部が面取りされる口縁部にある。口縁部の内外と肩部には凸帯が巡り、口縁部内面上半と胴部上半に横位の紋様帯を持つ。口縁部内面の紋様帯は、凸帯より上部に、櫛描原体による横方向3段羽状の刺突。胴部は凸帯より下に櫛描横線紋とやや太い施紋具で描かれる山形紋を交互に配し、紋様帯最下段には山形紋と同様と考えられる施紋具の刺突による列点を巡らす。横線紋は中段のみ2条、他は単条で、摩滅のため観察は不確実だが断続は1か所だけのようだ。紋様帯以外の外面と口縁部内面、頸部内面および山形紋の線上は赤彩される。器面調整は、口縁部は摩滅して不明瞭、頸部と胴部下半の外面は横のミガキ、胴部内面は中央部が板ナデ、下半がハケメで、胴部外面下半のミガキの地には僅かにハケメが窺える。おそらく赤彩部分にはすべてミガキが行われていたのであろう。色調は、器面・胎土ともに暗灰白～黄灰色で他の土器とは全く異なっており、第5図10の手焙形土器が唯一類似する。

②壺B

第3図2・3は紋様・器面調整・外形・規格の他に焼成・色調も極めて類似する。また同図4は頸部破片だが2・3同様の凸帯が巡るため、これら3個体を壺Bとして一括した。小片や、摩滅のため接合できないが、この2・3の胴部と見られる破片が若干量あり、本来は完形品として遺されていたと考える。

第3図2 口縁部と胴部は今回見出されたもので、初めての図化・提示。頸部は報告書24図に相当し、松商学園寄贈品。口径13.4cm、胴部最大径16.9cmを測る。胴部はほぼ球形。垂直に近く立ち上がる頸部から大きく口縁部が開く外形を呈し、口縁端部下面への貼り付けにより口縁外面を拡張している。その口縁端部外面と胴部上端に紋様帶を有し、口縁端部外面の上部は櫛描波状紋、下部には円形浮紋、胴部上端には櫛描横線紋、その下は二段に櫛描波状紋が巡る。円形浮文の表面は径の異なる2種の竹管による刺突で二重円が印される。櫛描波状文は波状と言うよりむしろ意図的

に上下を尖らせた山形紋風で、各段とも約半周で1~2か所の断絶を認めるが、その位置は描わないのである。頸部境界には凸帯を巡らして、その上に羽状を擬した刺突を行っている。器面調整は口縁部内外面と胸部の紋様帶以下が縦（放射状）のミガキ、頸部外面および内面上半が横のミガキ。胸部内面上半は輪積み痕を残すナデ、中位~下半が横から斜めのハケメである。色調は橙~赤橙色を呈し、焼成は良好。注記は「弘法山6列、S49・5・27」「4列、5・24⁽³⁾」「5・27」。松商学園寄贈品（頸部）の注記は「弘-m-24」。

第3図3 報告書61頁23図2に相当。口縁の1/3、胸部の2/5ほどを欠き、底部の形状は全く不明である。口径15.0cm、現存器高16.8cm、胸部最大径16.8cmを測る。外形の特徴は、球形の胸部、ほとんど垂直に立ち上がる頸部と、大きく開く口縁部にあり、頸部と胸部の境界には凸帯が巡る。口縁端部下面には貼り付けの剥落した、拡張口縁の痕跡が明瞭に残る。紋様帶は口縁部外面と胸部上端にあり、いずれも横位で、口縁部外面に2段の構造波状文、胸部は上から頸部との境界の凸帯上に羽状の刺突、1条の構造横線、2条の構造波状文で構成される。赤彩は頸部上半および口縁部下半の外面に僅かに残っている。器面調整は口縁部内外面と胸部が縦（放射状）のミガキ⁽⁴⁾、頸部内外面が横のミガキ、胸部内面が上部はナデ、中央以下は横から斜めのハケメで行われる。前述のように、本個体は第3図2に紋様構成、器面調整ともに類似しており、剥落した拡張口縁の部分にはおそらく円形浮文が巡らされていたことは想像に難くない。色調は橙~赤橙色、焼成は良好だが、摩滅が進んでいる部分がある。

第3図4 報告書図版第43の3に相当。松商学園寄贈品。「く」の字にくびれる頸部破片で、構造原体による羽状の刺突が巡る凸帯を有す。凸帯下には構造横線文があるようだがよくわからない。色調は橙色でやや軟質、摩滅が進んでいる。注記は「弘-m-7」。

③壺C

二重口縁の形態をとるもの、その一部と推測されるものを本類にまとめた。第3図5~7が相当する。5・6は大形破片だが同一個体に同定できる他の破片が見当たらず、当初から一括品として遣されていたか疑問である。

第3図5 今回、見出されたもので、初めての図化・提示。口径17.9cmを測り、口縁全周の約1/3が残存する。外形は、頸部から大きく開いて、いったん稜を作ったのち外方に45度くらいの傾斜で立ち上がり、そのまま徐々に強く外反して口縁端部に至る。口縁端部には面を持ち、その上下端は僅かにつまみ上げられている。紋様は口縁端部の面に縦の細い棒状浮文を5mmほどの間隔で貼り付け、端部内面（上面）と立ち上がり部の稜直上に円形刺突文を巡らしている。棒状浮文の地には細かい構造横線が施され、同一原体で棒状浮文上にも2か所づつ横の刺突がなされる。円形刺突文は、端部内面のものは直径3mm、稜直上は直径6mmの2種類の竹管が用いられている。器面調整は内外面とも縦（放射状）のミガキであるが、稜直上の円形刺突文の下には僅かにハケメが見える。色調は橙~黄橙色を呈し、焼成良好で堅緻。注記は「弘6列、790527」。

第3図6 今回、見出されたもので、初めての図化・提示。大きく開く口縁部の破片で、全周の約1/4が残存しており、口径22.9cmを測る。端部に面を持ち、そこには描模横線の上に縦に貼り付けた棒状浮文を横線と同一原体で縦に刺突した紋様が施されている。器面調整は内外面ともに縦（放射状）のミガキ。色調は橙～赤橙色で焼成やや良。注記は「弘、6列」「弘・主・東拡」。

本資料は口縁端部の面取りや施文様式が第3図6に類似しているため、二重口縁壺の一部と推定し壺Cに含めた。

第3図7 従来からの出土品だが、今回初めて接合、図化されたもの。同一個体と見られる破片が多数あるが（特に胴部片）、摩滅が著しく、図化部分以外の接合・復元は不可能であった。頭・胴接合部の径7.6cmで、その約1/5が残存している。器面の摩耗も激しく、調整は内外面に縦のミガキ、胴部内面にハケメの痕跡がそれぞれ僅かに窺えるにすぎない。色調は橙～橙灰色を示し、焼成あまく軟質。注記は「弘・主・北」。

本資料は残存部位から見て二重口縁壺あるいは直口縁壺になると推定するが、一応、壺Cに含めた。

④壺D

本類は東海地方西部に分布するバレス壺の口縁部に類似するものをまとめた。第3図8・9が相当するが、いずれも破片で、古墳築造当初から一括品として遺されていたものではないであろう。

第3図8 今回の整理で見出され、図化・提示は初めてのものである。正確な口径の復元が不可能な口縁部破片1点のみ。他は同一個体の胴部らしき破片が4・5点あるが接合しない。僅かに内傾する拡張口縁の外面に2本の擬凹線と縦の棒状浮文貼り付けを行っている。内面はナデと雜な板ナデ痕が見え、外面の擬凹線も雜で幅や向きがきれいに揃わない。色調は橙～赤橙色。焼成は良い。注記「弘・猪土手下、7905」。口径は15cm前後になると概測される。

第3図9 松商学園寄贈品。長野県史（笛沢1988）に実測図が掲載されたことがある。口縁部の1/4程が残存する破片で、口径は17.1cmを測る。ほぼ直立する口縁外面に2本の棒状浮文が貼り付けられている。単位数は不明。地に擬凹線のようなものが僅かに窺える。色調は橙色で焼成は良好だが、摩滅が進んでいる。注記は「弘-m-44」。

(2) 高杯

脚端部の形態によりA～Cの3種に分類した。すなわち、内湾するものが高杯A、直線的ないしは極く僅かに内湾するものが高杯B、外反するものが高杯Cである。

①高杯A

第4図1・2が該当するが、両者は胎土・色調・焼成がまったく異なり、一括して扱うのは問題があったかもしれない。

第4図1 脚部下半は報告書23図3、上半は同図17に相当し、両者の接合と杯部を加えた復元・図化は今回の整理で初めて行われた。杯部は1/2、脚部はほぼ完存し、口径23.8cm、底径11.1cm、

器高16.1cmを測る。外形の特徴として、杯部は下方に稜を有して内湾しながら大きく外開し、脚部は下半が僅かに内湾しながら下方に開く。また杯部口唇の内側には意図的に作られた面があり、脚端部は僅かに内面に折り返しが認められる。脚部中位にはほぼ等間隔に3個の円孔が外から中に向かって穿たれている。器面調整は、脚部内面を除きミガキが観察され、杯部口唇内側の面が横方向の他は縦（放射状）に行われている。脚部内面の調整は板ナデとナデ。焼成は良好、堅緻で、器面は全体的に橙から赤橙色を呈すが赤彩によるものではない判断する。本古墳出土土器の中では極めて器面の残存が良好で、他の個体との識別が最も容易であった。

本資料は当初、埴と考えられていたが、埴の口縁ではなく、高杯の脚部下半であるとの指摘を最初に行ったのは青木一男氏である（青木1984）。また長野県史でも脚部として扱われた（籠沢1988）。その後の整理で脚部上半の接合は認められていたが、今回、杯部が得られ全形が初めて明らかになった。

第4図2 内湾する脚部下半の破片で、報告書23図8に相当すると考えるが、端部が異なり疑義が残る。残存は約1/3で、底径12.3cm、現存器高5.5cmを測る。端部内面には僅かに折り返し状の稜を持ち、円孔はほぼ脚中位に3個穿たれる。器面は摩滅が進んで調整はほとんど観察できないが、外面に縦のミガキ痕、内面上部にシボリ痕らしきものが僅かに残る。色調は橙～暗橙色を呈し、焼成不良で軟質。

②高杯B

第4図3～5の3個体を該当させた。いずれも色調・焼成などまったく同じで、しかも接合できなかった同一（同種）個体と見られる破片数が各種高杯の中で最も多い。古墳築造当初から一括品か複数個体造されていたのであろう。しかし、今回の整理時には、軟質な胎土のため摩滅が進行、細片となって接合・復元は困難を極め、最終的に杯・脚接合部の数から当初の個体数を算定した。

第4図3・4・5 いずれも報告書では一部が提示されていたにすぎない。3は杯部が報告書23図7、脚部が同図13に、4は脚部が同図16に、5は杯・脚接合部が同図14に対応する。他の部分は今回初めて接合・固定された。3は口径21.9cm、底径10.7cm、器高13.2cm。4は口径21.8cm、底径11.8cm、器高12.2cm。5は口縁・底部とともに欠損するが現存器高9.7cmを測る。外形の特徴は、直線的に開いて内湾気味に収まる脚端部と、杯部下方の僅かな稜に見られる。脚部中位や上に円孔が3か所穿たれる。器面調整痕は摩滅のためほとんど観察できないが、杯部内外面と脚部外面に縦（放射状）のミガキ、脚部内面の上半にシボリ痕、下半に横のハケメが僅かに見える。いずれも色調は橙～赤橙を呈すが焼成があまく非常に軟質で、触れるだけで器面が削れていく。胎土の表面近くに赤色の粒子が点在し、赤彩の痕跡のように見えるが、僅かに残っている器表面に赤彩は観察できない。

③高杯C

第4図6 高杯Cはこの1点のみである。報告書23図6に相当。ほぼ完形で、口径20.3cm、底

径10.8cm、器高14.3cmを測るがやや歪みがあり、口縁端部が水平にならない。杯部下方の僅かな稜と、直線的に開く脚部の端部外反が外形の特徴である。また杯・脚接合部がA・B類に比べて肉厚になっている。脚部中位には円孔が3個穿たれる。器面調整は、脚部内面が摩滅のため不明だが、杯部外面と脚部外面は縦方向（放射状）のミガキで、脚部ミガキの下地には斜めのハケメが僅かに見える。色調は暗橙～黄橙色を呈し、焼成はあまり良くない。

(3) 小型高杯

無紋のものをA類、有紋をB類とした。色調・胎土・焼成でも両者は大きな異なりをみせ、A類は比較的焼成が良く赤橙色を呈すのに対し、B類は橙～薄橙・暗橙褐色で焼きがあまく器面の摩滅が進んでいる。A類は第5図1・2の2点のみで、それ以外に同種・同一個体の破片も見当たらなかったが、B類は少なくとも5個体以上あり、摩滅などで接合できなかった破片数も多い。当初から數点が一括品で遺されていたのである。

①小型高杯A

第5図1 従来からの出土品だが、今回初めて図化・提示された。やや厚手ではあるが、小型高杯の杯部と推定する。口径11.6cm、残存高2.7cmを測る。内外面には縦の比較的疎なミガキが行われ、外面の地には僅かにハケメが窺える。焼成は良好で胎土堅緻。器表面が赤橙色、胎土が橙色を呈す。注記は「弘・主・北」「弘・主・南」「弘・主」。本個体は焼成・色調及びミガキの間隔が疎な点などの類似から、次に述べる第5図2の小型高杯脚部と同一個体である可能性が極めて高い。

第5図2 報告書23図15に相当する。杯部を失っており、中位から急激に屈曲して大きく開く脚部は、底径18.1cm、残存高5.3cmを測る。杯・脚接合部の小片も残るが、接点がない。屈曲部の下には円孔が3か所に穿たれる。外面は赤橙色を呈し、焼成良好で胎土は堅緻である。器面調整は、外面は横のハケメの上に縦のミガキ。内面は下半部に斜めのハケメが左回りに施される。前述の第5図1の杯部と同一個体である可能性を認め、組み合わせた形で図示したが杯部下半に稜の存在を想起しないと不自然な感がある。

②小型高杯B

第5図3・4 いずれも脚部のみで、8の杯部を組み合せることによって全形を想定した。3の上半は報告書23図12、同じく4は同図9に対応し、脚下半は今回初めて接合された。それぞれ底径21.6cm、現存器高6.9cmと、底径21.3cm、現存器高5.4cmを測る。円筒形の上半部から急激に外開する下半部が特徴的だが、3が僅かに内湾して彫れ上がるような感じに対して4は直線的に端部に至っている。また屈曲部付近には3円孔が穿たれる。紋様は円筒形の上半部に横描横線紋を廻らし、その下端には同様原体によるとみられる斜めの刺突を連続させている。器面調整は、外面が縦のミガキ、内面が斜めのハケメで、円筒部内側にはシボリ痕が窺える。色調は橙～薄橙色を呈し、3の内面のみ黒褐色の部分が広がっている。胎土は精選されているが焼成があまく摩滅が激しい。

第5図5・6・7 いずれも脚部上半の円筒部分のみ。5が報告書23図11、6が同図10に対応し、

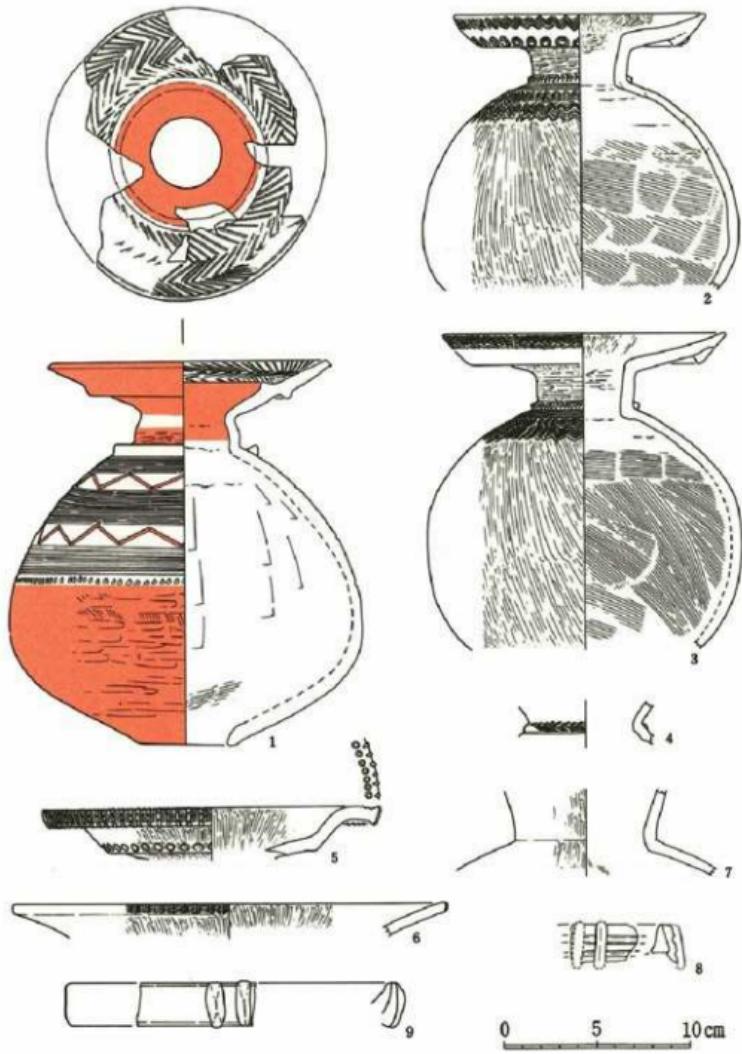
7が今回初めて見出されたものである。紋様構成、外形の特徴は前記3・4と全く同じで、色調や焼成も酷似する。このため3・4と同様形態の脚部下半を有していたと推定する。7の注記は「5/25后 莖石7~8中間」。

第5図8・9 半球状を呈す杯部の破片。いずれも今回初めての報告で、8は口径11.3cm、9は13.9cmを測る。器面は摩減して調整不明だが、色調・焼成が類似することから本類に含めた。3~7の脚部と同一個体になると推定する。しかし8と9では口径や器厚がかなり異なり、この差異に比例する違いが3~7の脚部に感じられない。あるいは3・4の脚部に見られる、下半部の反りの違いが対応するのであろうか。

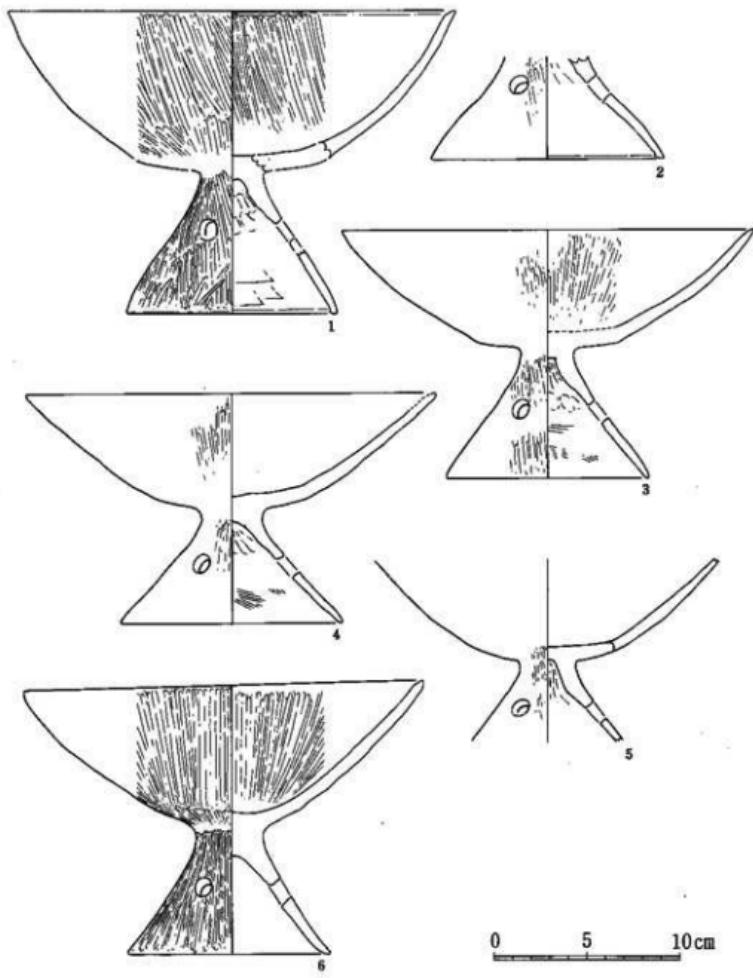
(4) 手焙形土器

第5図10の1個体のみ。鉢部口縁1/3、同体部1/2、覆部1/5、面部（覆部折り返し）5/6ほどが残存する。鉢部は深い椀形で、口縁は外反した後立ち上がるS字状を呈す。小さく収約する底部は中央に直径1.6cm、深さ0.4cmの窪みを有する上げ底となっている。残存する口縁端部のすべてに覆部の剥離痕が見られること、加えて面部端が口縁に1か所残る瘤状突起と無理なく合わさることから、覆部は口径全周の2/3程にかぶさるように接合されていた外形が想定できた。紋様は面部正面の4条の微隆起帯間2列に円形刺突、同部裏面外側に構造波状文が1条描かれる。また、体部3条の横走沈線は地のハケメと組み合わさせて紋様的な雰囲気を持つ。器面調整は、覆部が摩減で不明、鉢部は外面が2段の縱と斜めのハケメ、内面がナデで行われる。特に鉢部外面のハケメは、意図的に下段に太く強いハケメを使い分けており、その点からも紋様的な効果をねらったことが窺える。覆部の中位には中央に1本の沈線を持つ低い凸帯が水平に巡る。色調は覆部が黄灰色、鉢部が暗灰~灰褐色を呈し、焼成はやや軟質。この胎土焼成は、在地の土器とは際立って異なり、弘法山古墳出土土器の中では第3図1の壺A以外に類似するものはない。

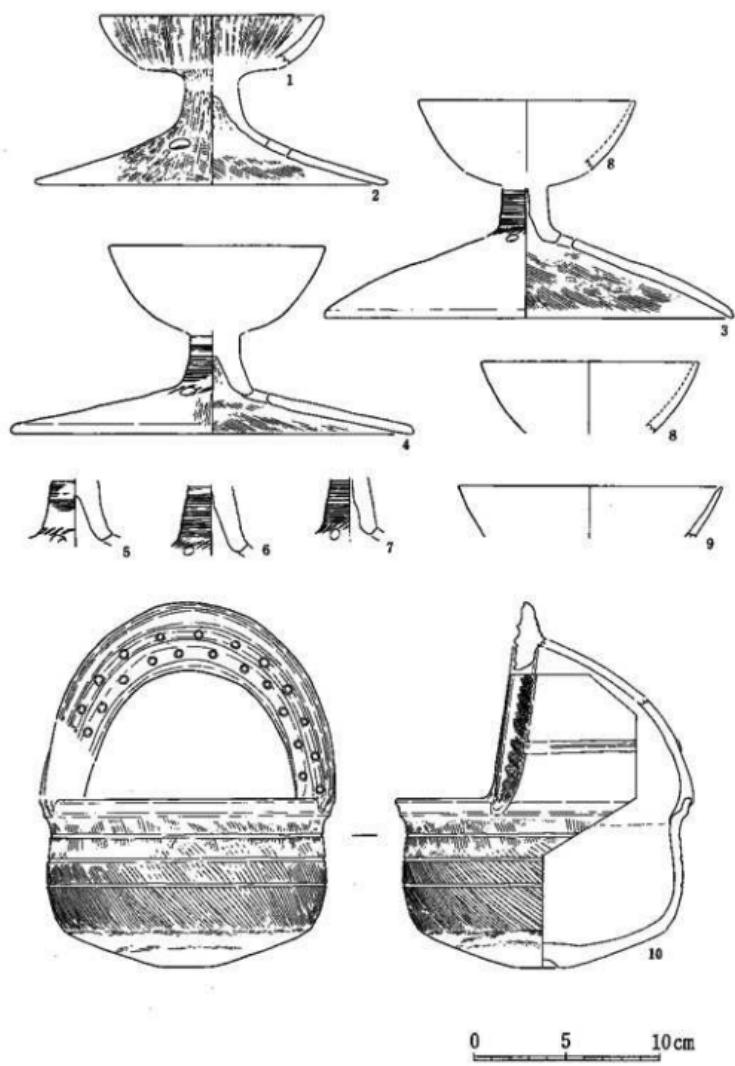
本土器の鉢部は報告書23図5で「椀形土器」に、また覆部は同図4で「壺形土器」とされたものに相当する。報告書では手焙形土器の可能性を考慮しながらも、最終的に否定し、椀形土器としたのだが(128頁18行)、それを敢えて手焙形土器と断定し、初めて紹介したのは都築みどり氏であった(都築1981)^⑩。その後、青木一男氏も同図4を手焙形土器の破片と述べ(青木一男1984)。長野県史に至って、本土器の覆部と鉢部をそれぞれ別の2個体の手焙形土器として図化・掲載した(榎沢1988)。筆者は前段で述べたように、本土器は1個体の手焙形土器であるとの見解を探る。したがって弘法山古墳には築造当初から1個の手焙形土器が一括品で遺されていたと考えるものである。



第3図 出土土器(1) 壺



第4図 出土土器(2) 高杯



第5図 出土土器(3) 小型高杯 手焙形土器

3. 色調・焼成より見た土器群

上記の圓化土器を含む本古墳出土土器には、器種の違いを超えて類似する色調・焼成を持つまとまりが見られる。ここではA～Dの4群に分けてそれを捉えてみたい。ただし科学的な胎土の分析は未だ行われず、分類の基準は主観的な要素が強い。にもかかわらず敢て分類するのは、古墳築造当初から墳頂部に遺された土器のまとまりを探りだす有力な手掛かりになると考へるからである。

(1) A群

第3図1の壺A、第5図10の手焙形土器で構成する一群。圓化した2個体とも残存部分が多く当初から一括品で遺されていた可能性が極めて高い。ただし、この2個体以外は破片資料もほとんど無い。色調は灰白色・黄灰色から暗灰色を呈し、灰色を基調とするのが特徴である。土器各説でも触れたが、本古墳出土土器の中で他と際立って異なり、在地の遺跡出土の同期や他時期の土器にも類似例は極端に少ない。搬入品であろう。

(2) B群

焼成が良く、色調が赤橙色から橙色を呈す一群。赤味の強い研磨された器面は赤彩と誤認されることがあるが、水廻した化粧土掛けによると考える。第3図2・3の壺B、第4図1の高杯A、第5図1・2の小型高杯Aが該当する。圓化したものに破片は少なく、いずれの個体も残存部分が多い。当初から一括品で遺されていたのである。本古墳出土土器の中では最も焼成が堅緻で遺存状態が良く、器面調整も明瞭に観察できる一群である。在地の土器焼成に近い。

(3) C群

黃橙色・橙色から灰橙色を呈し、焼成があまく軟質な一群。同期の在地の小型品土器の焼成に近い。第3図7の壺C、第4図3～5の高杯Bが該当する。摩滅が著しく、類似する小破片が多量に残るが接合できない。ただし高杯は杯・脚接合部の数からみて圓化できた3点の他、もう2点が認められる程度であろう。破片の量から推定して、いずれも一括品で遺されていた可能性が強い。胎土中に赤褐色の粒子が混じり、これが赤彩の痕跡と誤認されるが、僅かに残存する器面に赤彩はない。

(4) D群

薄橙色から暗橙色を呈し、焼成があまく軟質な一群。C群によく似るが胎土が細かく、精製されている。また器表面を除く胎土が、僅かに灰色から暗灰色の還元状態を示すのも大きな特徴である。第4図2の高杯A、第5図3～9の小型高杯Bが該当する。小型高杯Bは多数の接合不能な破片が残っており、当初から5個体が完形品で遺されたものであろう。高杯Aの杯部破片については、小型高杯やC群の高杯の破片と紛れて同定不能。あるいは当初からの一括品ではなかったかもしれない。

(5) その他の土器

上記A～D群に挙げた土器の他はこれといった特徴がなく、どこかに属させることが難しい。強

いて挙げれば、第3図4・5の壺はC群かD群、同図8・9の壺DはB群かC群、第4図6の高杯CはC群かD群になる。特にC・D群は器面が摩滅しており、器面を良好に残すものを含めることが不明瞭となってしまう。

4. 弘法山古墳出土土器の編年的位置

(1) 従来の見解

弘法山古墳出土土器については、既に報告書で以下の様ないくつかの重要な指摘が行われていた（大塚1978）。

①在地の系統をひく器形・紋様の影が薄く、東海地方西部、ことに伊勢湾沿岸地域との濃厚な関係を示す資料が含まれている。

②関東地方の古墳出土土師器に比べて最も古式な特徴を持つ。

③東海地方最古式の土師器と同じ特徴の土器が出土している。

④土師器の実態から推定して、弘法山古墳の出現は4世紀前半。

その後、石野博信氏は全国各地の古墳出現期の具体相を検討する中で、弘法山古墳は縦向2式（庄内1式）期に出現した古墳であるとの考えを発表した。その注釈中で「元屋敷式を欠山式の次期におく考えが一般的であるが、そのことは実証されていない。欠山式と元屋敷式は地域差である可能性が考えられる。」と、東海地方西部の編年観に言及しつつ「弘法山古墳の土器は、箱清水2式＝四郷式＝縦向2・3式＝庄内式の範疇で捉えうるものであり、布留式以降ではない。」と具体的な時期を限定した（石野1983）。これに対して岩崎卓也氏は縦向3式以前に遡らないという考え方を示し（岩崎1984）、さらに翌1985年に、壺Bと手焙型土器の検討から、再度、弘法山古墳の年代は「遡っても石野氏の縦向3式期をこえるものではない」とした。一方、石野氏も1985年に『長野県弘法山古墳の検討』を著し、前稿の論点を補強し弘法山古墳出土土器は「箱清水II式土器と元屋敷式土器の共伴例」という認識のもとに「近畿の庄内式併行期に相次する壺然性が高いのであり、布留式土器の段階まで下げて考える必然性は認められない。」と強調した（石野1985）。この間、都築みどり氏は東海地方西部での土器の編年研究の中で、壺A・B、高杯Cの様相から「元屋敷新段階」に位置付けた（都築1983）。

個々の土器については、第3図1の壺Aが最も多くを語られてきた。報告書では、東海地方西部の終末期弥生土器の系譜をひき、愛知県朝日遺跡東部地区出土品にきわめて近似した例が認められるという（大塚1978）。岩崎卓也氏は、赤彩や紋様構成、胴部最大径の位置などが、いわゆるパレス・スタイルの壺によく似ているが、口縁部形態が大きく異なっており、この違いは、壺Aが「系譜的にはむしろ派生的なもの」で、口縁部は「別系列の壺（おそらくは桜井茶臼山古墳の壺形品に代表されるもの）との接触変容の結果」と想定した（岩崎1985）。また、石野博信氏は「縦向遺跡南溝（南部）中層壺の=縦向2式（「縦向」図83-57）と類似」と指摘する。さらに、浅井和

宏氏は紋様のあり方及び体部の形状から「宫廷式土器E類（新）」に位置付け、「元屋敷期」にあたるとしている（浅井1986）。

壺Bについては、岐阜県四郷遺跡出土品に近似するものがあると報告書は認めている（大塚1978、四郷遺跡については紅村1963）。

（2）各器種・器形の時期比定

ここでは再整理によって明らかになった器種・器形毎に各地の編年観に照らし合わせて時期的なことを考えてみたい。なお「」は、当該文献で使われている用語を示す。

①壺A

前述の様に口頭部の形態が典型的なものではないので、直接に比べるのは難しいが、先の浅井氏によれば脇部紋様は「元屋敷期」にあたり、口縁部外面の凸帯の位置関係は愛知県「廻間遺跡7期（廻間III式1段階）」の「壺A₄」（赤塚1990）に似る感がある。

②壺B

外形・紋様から畿内の出土品に多く類例が追えると考える。具体的には奈良県纏向遺跡の古式土器器種分類における「壺A₃」（関川1976）、同じく奈良県矢部遺跡における「二重口縁N-C₂」（寺沢1986）などが相当しよう。矢部では加飾される二重口縁壺は「様相6（布留1式）」までで姿を消し、さらに本類のような「二重口縁壺C」は「様相5・6（布留0式・1式）」に存在が認められている。また纏向では「壺A₃」は「纏向3式」に存在するとされる。長野県内では飯田市恒川遺跡の弥生時代後期から古墳時代土器形態分類の「壺B_{1a}」が対応し、「恒川VI期」（山下1986）に類例が見られる。

③壺C

第3図6は口縁部の途中に大きな段を有する二重口縁壺で、口縁端部のつまみ上げや棒状浮文が、「廻間遺跡7期（廻間III式1段階）」の「壺F」に類似する。ただし段部外面にも紋様を持つ。

④高杯

いずれも濃尾地方の影響を受けたものと考える。廻間遺跡での成果を援用すると、脚端部が内湾するA類は「廻間遺跡6期古相（廻間II式3段階）」まで。一方、外反するC類は同「6期新相（II式4段階）」から現れている。B類の脚部はほぼ直線的で何とも言えないが、杯部の緩い傾きや径の縮小からみて、やはり「6期（II式3・4段階）」以降であろう。

⑤小型高杯

第5図3に復元した器形は畿内の楕形高杯に極めて類似する。時期的位置は、米田敏幸氏によると「楕形高杯」の「庄内式期II～IV」（米田1991）、纏向では「高杯C₃」の「纏向2～3式」、矢部では「高杯E₄」の「様相4～6（庄内3式～布留1式）」にあたる。廻間では「廻間遺跡8期（廻間III式3段階）」に「搬入・模倣品」が認められている。一方、第5図3～7の脚柱部に巡る

描绘横線紋は濃尾地方の特徴である。

⑥手培形土器

本例は鉢部の丸みが余り感じられないが、大阪府茨園遺跡の「II期B3類」(野藤1985)、矢部の「様相4~6 (庄内3式~布留1式)」くらいの「手培形土器C形式」に類似すると考える。

(3) 編年上の位置推定

前述の畿内および濃尾平野の編年の中で、近年、最も引用されることが多い3編の編年に各土器の時期を当てはめた結果は次の第6図の様にまとめられる。即ち、「縦向2~3式」、矢部「様相3~6 (庄内2式~布留1式)」、「廻間遺跡5~7期 (廻間II式1段階~III式1段階)」の間であり、3者の併行関係が表の通りであるならば⁽⁶⁾、最も重複が著しいのは「縦向3式」、矢部「様相4~5 (庄内3式~布留0式)」、「廻間遺跡6~7期 (廻間II式3段階~III式1段階)」になる。従って弘法山古墳出土土器群の総体とした時期はこの間に求められるであろう。実年代は矢部遺跡や廻間遺跡の年代比定にそのままあてはめると3世紀の末から4世紀の初頭、となる。

縦向	矢部	廻間	壺A	壺B	壺C	高杯A	高杯C	小型高杯B	手培
縦向2	様相3 庄内2	廻間II-1	廻	縦	高	廻	高	縦	矢
	様相4 庄内3	廻間II-2							
縦向3	様相4 庄内3	廻間II-3	矢	高	廻	高	高	縦	矢
	様相5 布留0	廻間II-4 廻間III-1							
縦向4	様相6 布留1	廻間III-2	矢	高	廻	高	高	縦	矢

第6図 器種・器形の時期比定

註

- 発掘調査が、従前の土地所有者であった松商学園主催と、松本市教育委員会の二次に渡り、出土品が分散したこと、墳頂上面が擾乱されて土器の遺存状態が極めて悪かったことに加え、市教育委員会で発掘調査の窓口となつた小松慶氏が報告書刊行の翌1979年に不慮の事故で亡くなつたことが、出土品の収集・保管とその後の整理作業に計り知れない障害をもたらした。
- 都築1981、青木1984など。
- 今般、見出された遺物は故小松慶氏の取り上げ・注記で、「6列」、「4列」などの意味は不明である。筆者が推定するに、後方部墳頂の埋葬主体上部に検出された、平行に走る10条ほどの織列帯（報告書19頁8行）の西ないしは東端から6列目、或いは4列目を示すのではないか。それなら後方部墳頂のはば中央部に等しい。
- 報告書では副部外面に部分的にハケメを認めているが（報告書61頁23図、同63頁16行）、筆者の観察では洗浄時の傷と判断する。
- 都築氏の論考が発表された当初は、報告書文中での手培形土器の否定を無視し、あたかも報告書の実測図と掲載写真のみから手培形土器であるとの断を下したかに読み取れて、なんと一方的な表明であろうかと評しく思つたが、今回、再整理を行つてみると、すべてが氏の指摘通りとなつた。あらためて、氏の見識と頗る感服し、敬意を表す。
- 縦向遺跡と矢部遺跡の併行関係は寺沢1986に、矢部遺跡と廻間遺跡は赤原1990に掲つた。

引用参考文献

- 弘法山古墳または古墳出土品に言及したもの
- 齊藤 忠1975「松本市弘法山古墳調査概報」『信濃』27-4 1~24頁 信濃史学会 松本
- 大家初重1978「土師器」「弘法山古墳」59~69頁 松本市教育委員会 松本
- 大冢初重1978「弘法山古墳出土の土師器について」『弘法山古墳』126~131頁 松本市教育委員会 松本
- 筒井 泰1980「弥生時代」『編年－中部高地における型式－』159~203頁 信毎書籍出版センター 長野
- 都篠みどり1981「松本市弘法山古墳出土の手培形土器」『考古学ジャーナル』18-25・26頁 東京
- 石野博信1983「古墳出現期の具体相」『関西大学考古学研究室開設参照周年記念考古学論叢』111~131頁 関西大学 吹田
- 都篠みどり1983「元量取式土器の再検討」『南山考古』第2号 13~32頁 南山考古学会 名古屋
- 稻原 健1983「弘法山古墳」「長野県史 考古資料編」1-(3) 249~258頁 長野県史刊行会 長野
- 青木一男1984「菅原寺甲跡場における古墳出現期の坐席出土の土器」『關田山三里シンボシウム 古墳出現期の地誌』5~9頁 丁曲川水系古代文化研究所 戸倉
- 岩崎卓也1984「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学』237~252頁 長野県考古学会 松本
- 岩崎卓也1984「シンボシウム「古墳出現期の地誌」に向けて」第5回三里シンボシウム 古墳出現期の地誌』5~9頁 千曲川水系古代文化研究所 戸倉
- 石野博信1985「長野県弘法山古墳の検討」『信濃』37-4 33~42頁 信濃史学会 松本
- 岩崎卓也1985「土師器による編年」『美術 考古学』第10号 27~30頁 雄山閣 東京
- 浅井和宏1986「青石丸七面について」『久穴式土器とその前後』318~336頁 爱知考古学講習会 名古屋
- 望月幹夫1988「土器・上製品」「古墳の知識II 出土品』138~144頁 東京美術 東京
- 皆沢 浩1988「古代の土器」『長野県史 考古資料編』1-(4) 257~351頁 長野県史刊行会 長野
- 矢島宏雄1990「中部高地」「古墳時代の研究II 地域の古墳II 東日本』59~77頁 雄山閣 東京
- 橋本透朗1991「古墳出現のなぞ－微動の世纪に迫る－』105頁 桜木県立博物館 宇都宮
- その他
- 紅村 弘1963「東海の先史遺跡 錦糸編」167~168頁 名古屋鉄道株式会社 名古屋
- 鶴川尚功1976「古墳時代初期の遺物 土器」『膳向』119~276頁 桜井市教育委員会 桜井
- 鶴川尚功1976「膳向遺跡の古式土器群」『膳向』433~459頁 桜井市教育委員会 桜井
- 野藤和也1985「美濃遺跡出土の手培形土器について」『美濃』517~531頁 大阪文化財センター 大阪
- 寺沢 寛1986「古式土器群の形式分類」『久部遺跡』64~85頁 奈良県教育委員会 奈良
- 寺沢 寛1986「畿内式土器群の編年と二・三の問題」『久部遺跡』327~398頁 奈良県教育委員会 奈良
- 山下誠一1986「弥生時代から古墳時代初期の遺物 土器」『田川遺跡』33~62頁 蝶田市教育委員会 蝶田
- 山下誠一1986「土器の編年」『田川遺跡』101~159頁 蝶田市教育委員会 蝶田
- 宇賀神誠司1989「摂津における古墳時代初期の地誌」『田原附地誌文化財センター紀要』2 1988 15~24頁 摂津附地誌文化財センター 摂津
- 赤城大郎1990「膳向遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 加納俊介1991「土師器の編年 東海」「古墳時代の研究6 土器』59~70頁 雄山閣 東京
- 米田敏幸1991「土師器の編年 近畿」『古墳時代の研究6 土器』19~33頁 雄山閣 東京

第3節 ガラス製小玉

前回の報告書では481個のガラス製小玉（以下では、「小玉」として記述する）が報告されている。このほかに原形が復原できない小玉の小破片が検出されていることから、本来は490個前後の小玉が頭飾り・手首飾りとして副葬されていたと想定されている。これら的小玉は色調からコバルトブルーと淡緑色を呈する2種類に分類され、前者については原子吸光法による科学分析の結果、アルカリ石灰ガラス製であることが確認されている。

今回報告する小玉群は新たに見つかった整理箱に収納されていたものである。この整理箱の中には、テグス（釣り糸）に連結された2連（107個と31個）の小玉群と、石室内から出土したと考えられる複数の土塊が存在した。後者の土塊については、赤色顔料が付着しているものや、表面に多量の小玉が混入している物が認められたことから、赤色顔料や小玉を一括で取り上げたものと推定した。そこで、これらの土塊の中から小玉の検出に努めた結果、6個の土塊の中から119個の小玉とその小破片を見つけることができた。このことから、前者の2連の小玉群についても、資料整理の過程で土塊の中から抽出された小玉群であると考えられる。

新たに確認された小玉の整理にあたっては、以下の方針を行った。

1. 遺物番号は前回の報告で481まで報告されているので、今回は482からの継続番号とする。

2. 一覧表の仕様を変更して、新たに2項目を設定する。

- 1) 小玉の計測値に重量の項目を追加する。
- 2) 小玉の色調は、一般的な色名とマンセル色記号を併記して、より客観的な報告に努める。
3. 原形に復原不可能な小破片は遺物番号はつけないが、色調・マンセル色記号については一覧表に記載する。
4. 小玉は直徑3、4 mmと小さいため、前回同様に図化は行わない。典型的なものについては写真撮影して図版掲載する。

以下では、小玉の概要について記述する。

前回の報告では小玉をその色調から2分類しているので、今回報告する小玉についてもそれに従っている。ただし、前回コバルトブルー、ブルー（一覧表）とされた色調を、今回はブルーで統一して記述している。

新たに検出された小玉は総計257個をかぞえる。このほかに、原形を復原できない破片15点（ブルー11点、淡緑色4点）がある。このうち、出土位置が特定できるものは、「鏡周辺の土 6. 9. 9時」の注記のある1点（482）と「主、剣ノ北 6. 9 午後」の注記のある23点（483～505）だけである。前者については注記が「1974年6月9日午前9時に鏡周辺から取り上げた土塊」を意味しているので、頭飾りと想定された小玉群に属するものと推定される。後者については注記が「1974年6月9日午後に鐵剣の北側から取り上げた土塊」を意味しているので、第3号鐵剣の柄の

北側から出土した、右の手首飾りと想定された小玉群に属するものと考えられる。

ブルーを呈する小玉は244個をかぞえる。大きさは長径3.00~4.80mm、短径2.75~4.70mm、厚さ1.10~3.60mm、重量0.02~0.12gの範囲内にある。色調については濃淡や透明度の違いによる個体差が認められるが、マンセル色記号の10B G6/6が119点と全体の48.8%を占めている。なお、遺物番号704の小玉は、他の小玉が透明または半透明なガラスであるのに対して、不透明な青色を呈しており異質である。

淡緑色を呈する小玉は13個をかぞえる。大きさは長径3.20~4.70mm、短径3.00~4.60mm、厚さ1.00~3.55mm、重量0.01~0.11gの範囲内にある。色調についてはマンセル色記号の5 G6/6が5個と全体の38.5%を占めるが、表面が風化しているものが多く、本来の色調は不明なものである。

また、両系統の小玉ともガラス内部の気泡は散在しているものが大半であるが、孔軸に平行した気泡列をもつものがわずかに認められる。また、淡緑色を呈する小玉には風化して孔軸に平行する触像が表面に認められるものがある。これらのことから、いずれの小玉も前回の報告で指摘されているように管切り法（註）によって製作されたと考えられるものである。なお、ブルーを呈する小玉には、表面に気泡が噴出してできたと思われる小孔が認められるものが多い。

最後に、前回報告分も含めた弘法山古墳出土のガラス製小玉についてまとめてみる。石室内から出土した小玉は総計738個が認められた。他に個体数が特定できない破片があるので、本来は750個以上の小玉が副葬されていたと考えられよう。これらは頸飾りと手首飾りに使用されていたものである。これらは、被葬者が仰向けに葬られていたと仮定して、頸飾りとして240個、右の手首飾りとして168個、左の手首飾りとして90個を確認することができた。そして、残りの240個（今回報告分では233個）の小玉については頸・手首飾りを構成していたと考えられるものの、出土位置は特定できなかった。そのため、着装部位による小玉の構成比を復原することは今後とも不可能である。今後は装身具としての小玉のあり方を追求するのではなく、ガラス製小玉の属性分析等を進めいくことで原料や製作技術を復原していくことが課題であると考えられよう。

註 ガラス製小玉に関する用語は次の文献に依っている。

小瀬康行 1987 「管切り法によるガラス小玉の整形」 『考古学雑誌』第73巻第2号

ガラス製小玉一覧表

凡
例

色調：ブルー・B、淡緑色-LG 色記号—マンセル色記号
 土塊1(続) -「鏡周囲の上 5.9.9時」の注記がある土塊
 土塊2(側) -「主、無ノ北 6.9 午後」の注記のある土塊
 土塊3 ~ 5 - 小玉を抽出できたが、注記のない土塊

単位：mm, g

番号	色調	色記号	最大径	最小径	最大厚	重 克	備考	番号	色調	色記号	最大径	最小径	最大厚	重 克	備考
482	B	2.5 B 6/6	3.79	3.50	1.46	0.95	土塊(鏡)	551	#	2.5 B 6/6	4.70	4.50	2.05	0.11	大 通
-	LG	7.5G Y 7/8	-	-	-	-		552	#	#	4.60	4.50	2.00	0.09	
483	B	10BG 6/6	3.69	3.45	1.90	0.66	土塊2(鏡)	553	#	10BG 6/6	3.40	3.30	2.10	0.06	
484	#	10BG 6/6	4.65	4.00	2.70	0.69		554	#	#	3.70	3.65	1.60	0.06	
485	#	#	4.15	3.85	2.30	0.66		555	LG	10 G 6/6	3.30	3.00	3.55	0.06	
486	#	10BG 6/6	3.49	3.05	2.00	0.65		556	B	10BG 6/6	3.70	3.50	1.60	0.06	
487	#	10BG 6/6	4.95	3.85	2.25	0.67		557	#	#	3.80	3.70	1.45	0.06	
488	#	2.5 B 6/6	4.35	4.10	2.60	0.68		558	#	2.5 B 7/8	3.50	3.20	1.45	0.05	
489	#	10BG 6/6	4.00	3.70	2.55	0.66		559	#	10BG 6/6	3.60	3.25	3.05	0.09	
490	#	#	3.75	3.60	2.70	0.67		560	#	10BG 7/8	4.10	3.95	2.50	0.09	
491	#	#	4.70	4.50	3.00	0.11		561	#	10BG 6/6	4.15	3.50	2.30	0.07	
492	#	#	4.49	4.25	2.80	0.69		562	#	10BG 7/8	3.10	3.00	2.15	0.06	
493	#	#	4.00	3.70	2.00	0.65		563	#	#	3.30	3.20	2.50	0.06	
494	#	10BG 7/8	3.65	3.30	2.40	0.07		564	#	2.5 B 6/6	3.85	3.70	1.95	0.07	
495	#	10BG 6/6	4.00	3.80	2.75	0.67		565	#	#	3.90	3.70	1.90	0.07	
496	#	10BG 7/8	3.49	3.20	2.40	0.06		566	#	#	3.45	3.20	2.55	0.06	
497	#	10BG 6/6	3.15	3.15	1.60	0.94		567	#	#	4.05	3.90	1.40	0.07	
498	#	#	3.50	3.20	1.20	0.04		568	#	10BG 6/6	3.50	3.40	1.65	0.07	
499	LG	5 G 6/6	3.20	3.10	1.80	0.05		569	B	10BG 6/6	3.60	3.50	2.35	0.06	
500	B	10BG 6/6	4.45	4.30	2.50	0.09		570	#	2.5 B 6/6	3.70	3.40	1.60	0.05	
501	#	5 B 5/6	4.89	4.35	2.15	0.08		571	#	10BG 7/8	3.45	3.25	2.15	0.05	
502	#	10BG 6/6	4.50	3.75	2.60	0.09		572	#	10BG 6/6	4.40	4.10	2.05	0.06	
503	#	#	3.90	3.70	3.15	0.06		573	#	#	3.30	3.10	2.90	0.05	
504	#	2.5 B 6/6	3.70	3.65	2.20	0.05		574	#	2.5 B 6/6	3.50	3.40	1.90	0.06	
505	LG	5 G 6/6	4.20	4.10	2.65	0.09		575	#	10BG 7/8	3.50	3.35	1.35	0.05	
506	B	10BG 5/6	3.75	3.55	2.75	0.06	大 通	576	#	10BG 6/6	3.40	3.10	1.60	0.05	
507	#	#	3.70	3.45	2.20	0.05		577	#	#	4.85	3.30	1.50	0.05	
508	#	10BG 7/8	3.45	3.30	1.50	0.04		578	#	#	3.35	3.20	2.10	0.05	
509	#	10BG 6/6	4.35	3.95	2.30	0.09		579	#	#	3.40	3.30	1.55	0.05	
510	#	#	4.75	4.30	2.40	0.10		580	#	10BG 7/8	3.60	3.30	2.55	0.07	
511	#	#	3.50	3.20	3.20	0.08		581	#	2.5 B 6/6	3.75	3.40	1.20	0.05	
512	#	#	3.50	3.50	2.75	0.07		582	#	10BG 6/6	3.30	3.15	1.45	0.04	
513	#	#	4.00	3.70	2.40	0.09		583	#	#	3.45	3.25	2.70	0.07	
514	#	#	4.15	4.15	2.65	0.11		584	#	2.5 B 7/8	3.65	3.75	1.95	0.04	
515	#	2.5 B 6/6	4.00	3.60	2.15	0.06		585	LG	5BG 6/6	3.70	3.30	2.80	0.09	
516	#	10BG 6/6	3.90	3.40	2.70	0.07		586	B	10BG 7/8	3.30	3.70	2.25	0.06	
517	#	#	4.70	4.70	2.15	0.12		587	#	10BG 6/6	4.00	3.85	2.20	0.08	
518	#	#	2.65	2.60	3.50	0.09		588	#	5 B 6/6	3.80	3.60	2.30	0.07	
519	#	#	3.80	3.75	2.40	0.09		589	#	10BG 6/6	3.30	3.20	2.45	0.06	
520	#	10BG 7/8	3.40	3.20	1.80	0.08		590	#	#	3.70	3.50	2.60	0.06	
521	#	2.5 B 6/6	3.75	3.50	2.15	0.09		591	#	10BG 7/8	3.35	3.10	1.60	0.04	
522	#	10BG 6/6	4.40	4.00	2.80	0.09		592	#	10BG 6/6	3.30	3.20	2.25	0.06	
523	#	#	4.40	4.20	2.95	0.10		593	#	2.5 B 5/6	3.60	3.00	2.95	0.05	
524	LG	2.5 B 7/8	3.60	3.45	1.95	0.06		594	#	10BG 6/6	3.90	3.70	2.15	0.07	
525	B	10BG 7/8	3.90	3.50	1.50	0.07		595	#	7.5BG 7/8	3.20	3.10	3.15	0.06	
526	#	2.5 B 6/6	3.15	3.00	2.00	0.08		596	#	10BG 6/6	3.65	3.60	2.30	0.06	
527	LG	2.5BG 6/6	3.45	3.20	2.35	0.09		597	#	#	3.10	2.80	1.55	0.05	
528	B	10BG 6/6	3.70	3.45	1.70	0.07		598	#	#	2.75	3.30	2.25	0.06	
529	#	#	3.75	3.60	1.45	0.09		599	#	#	3.85	3.50	2.15	0.07	
530	#	#	3.60	3.30	1.80	0.06		600	#	5 B 6/6	2.50	3.30	2.55	0.07	
531	#	2.5 B 6/6	3.80	3.75	2.40	0.10		601	#	10BG 7/8	3.30	3.10	2.25	0.06	
532	#	10BG 6/6	3.60	3.30	2.15	0.09		602	#	2.5 B 6/6	4.00	3.75	3.05	0.09	
533	#	#	4.15	4.00	2.20	0.08		603	#	5 B 5/6	3.70	3.55	2.30	0.06	
534	#	7.5BG 6/6	3.60	3.50	2.00	0.08		604	#	2.5 B 7/8	3.30	3.20	1.85	0.04	
535	#	10BG 6/6	4.00	3.70	1.85	0.08		605	#	10BG 6/6	3.70	3.50	2.35	0.07	
536	#	#	4.20	4.10	2.40	0.11		606	#	2.5 B 7/8	3.30	3.00	1.55	0.05	
537	#	7.5BG 6/6	3.70	3.60	1.20	0.07		607	LG	5BG 6/6	4.70	4.60	2.96	0.11	
538	#	10BG 6/6	4.00	3.70	2.00	0.11		608	B	10BG 5/6	3.55	3.45	2.55	0.06	
539	#	#	3.70	3.50	2.30	0.08		609	#	2.5 B 6/6	3.75	3.60	1.45	0.04	
540	#	2.5 B 6/6	4.15	3.85	1.95	0.09		610	#	10BG 6/6	3.75	3.40	2.65	0.08	
541	#	10BG 7/8	3.80	3.35	2.25	0.08		611	#	2.5 B 6/6	4.40	4.35	2.40	0.09	
542	#	#	3.40	3.25	3.25	0.08		612	LG	5 G 5/5	3.75	3.60	2.75	0.05	
543	#	10BG 6/6	3.90	3.75	2.00	0.06		-	B	7.5BG 6/6	-	-	-	-	
544	#	#	3.25	3.25	2.20	0.06		-	#	10BG 6/6	-	-	-	-	
545	#	#	3.95	3.65	2.40	0.08		-	#	10BG 6/6	-	-	-	-	
546	#	5 B 6/6	4.40	4.35	2.70	0.11		-	#	10BG 6/6	-	-	-	-	
547	#	7.5BG 7/8	3.40	3.20	1.10	0.04		-	#	10BG 6/6	-	-	-	-	
548	#	10BG 6/6	3.35	3.20	2.00	0.05		-	#	10BG 7/8	-	-	-	-	
549	#	10BG 5/6	4.45	4.20	2.15	0.18		613	#	10BG 6/6	4.30	3.60	3.00	0.07	小 通
550	#	10BG 6/6	3.85	3.70	1.40	0.05		614	#	2.5 B 6/6	4.30	3.90	2.05	0.07	

单位：mm, °

番号	色調	色 記 号	最大幅	最小幅	最大厚	重 量	偏 差	番号	色調	色 記 号	最大幅	最小幅	最大厚	重 量	偏 差
615	B	10BG 7/6	3.75	3.50	2.00	0.05	小 連	687	B	10BG 5/6	3.90	3.75	1.90	0.04	土塊 3
616	#	7.5BG 7/6	3.80	3.75	3.10	0.05	#	688	#	10BG 7/6	3.95	3.70	1.75	0.04	#
617	#	10BG 5/6	4.35	3.75	2.90	0.07	#	689	#	10BG 5/6	3.85	3.75	1.56	0.05	#
618	#	#	4.65	3.90	2.95	0.08	#	690	#	10BG 7/6	4.00	3.50	1.80	0.05	#
619	#	2.5 B 6/6	4.00	3.55	2.15	0.05	#	691	#	10BG 5/6	3.60	3.20	2.00	0.04	#
620	#	2.5 B 7/6	4.00	3.90	2.45	0.07	#	692	#	10BG 6/6	3.45	3.25	1.90	0.03	#
621	#	10BG 7/6	3.65	3.50	2.45	0.06	#	693	L.G.	5 G 5/6	4.00	3.50	2.10	0.04	#
622	#	2.5 B 6/6	3.95	3.50	1.60	0.05	#	694	B	10BG 5/6	5.00	4.50	1.50	0.06	#
623	#	10BG 7/6	4.20	3.85	2.35	0.07	#	695	#	10BG 5/6	4.20	3.80	2.50	0.07	#
624	#	5BG 6/6	3.70	3.55	2.10	0.05	#	696	#	10BG 5/6	4.00	3.80	1.75	0.05	#
625	#	#	3.85	3.70	2.20	0.05	#	697	#	5 B 6/6	4.15	4.00	2.10	0.06	#
626	#	#	3.35	3.25	2.00	0.06	#	698	#	10BG 5/6	4.10	3.80	2.40	0.06	#
627	#	#	4.00	3.80	2.40	0.06	#	699	#	#	4.00	3.90	1.50	0.04	#
628	#	#	4.60	4.10	1.50	0.05	#	700	#	#	3.55	3.40	2.00	0.03	#
629	#	#	3.55	3.40	1.90	0.05	#	701	#	#	3.85	3.60	2.00	0.04	#
630	#	10BG 7/6	4.15	3.80	1.85	0.05	#	702	#	2.5 B 6/6	4.25	3.95	2.10	0.05	#
631	#	#	3.90	3.65	2.10	0.05	#	703	#	10BG 5/6	3.25	3.00	1.90	0.03	#
632	#	10BG 6/6	4.00	3.60	2.40	0.06	#	704	#	2.5 B 4/6	4.65	4.50	3.10	0.11	#
633	#	#	3.85	3.45	2.00	0.05	#	705	#	2.5 B 6/6	4.25	3.95	2.10	0.05	#
634	#	2.5 B 5/6	3.95	3.75	3.00	0.05	#	706	#	7.5BG 7/4	4.50	4.40	1.80	0.07	#
635	#	10BG 5/6	3.80	3.80	2.45	0.05	#	707	#	10BG 6/6	4.10	3.75	1.70	0.05	#
636	#	#	4.00	3.75	2.40	0.04	#	708	#	2.5 B 6/6	4.00	3.70	1.75	0.06	#
637	L.G.	5 G 5/6	3.90	3.55	2.40	0.05	#	709	#	10BG 6/6	4.00	3.85	2.30	0.07	#
638	B	10BG 5/6	3.56	3.35	2.50	0.05	#	710	L.G.	5 G 6/6	4.15	3.75	2.50	0.06	#
639	#	2.5 B 6/6	3.95	3.80	2.85	0.07	#	711	B	10BG 6/6	3.75	3.50	2.50	0.06	#
640	#	10BG 7/6	3.50	3.35	3.10	0.05	#	712	#	#	3.40	3.30	1.85	0.04	#
641	#	10BG 6/6	4.15	3.65	2.40	0.07	#	713	#	10BG 7/6	3.45	3.25	2.40	0.03	#
642	#	10BG 5/6	4.40	4.20	2.60	0.09	#	714	#	10BG 6/6	5.70	3.40	3.20	0.06	#
643	#	10BG 6/6	4.95	3.55	2.00	0.06	#	715	#	10BG 5/6	4.45	4.15	2.20	0.05	#
-	#	10BG 7/6	-	-	-	-	#	716	#	2.5 B 6/6	4.00	3.75	2.15	0.05	#
-	#	7.5BG 6/6	-	-	-	-	#	717	#	10BG 6/6	5.75	3.60	1.90	0.06	#
644	#	10BG 7/6	4.35	4.10	2.50	0.09	土壤 3	718	#	#	3.90	3.70	2.30	0.05	#
645	#	2.5 B 6/6	4.00	3.90	1.85	0.05	#	719	#	#	4.35	3.90	2.20	0.05	#
646	#	10BG 4/6	3.70	3.30	2.80	0.07	#	720	#	#	3.95	3.80	2.20	0.04	#
647	#	2.5 B 6/6	4.00	3.80	1.60	0.05	#	721	#	2.5 B 6/6	4.30	3.30	1.95	0.03	#
648	#	10BG 6/6	3.15	3.00	2.75	0.05	#	722	#	10BG 6/6	3.40	3.30	1.65	0.03	#
649	#	10BG 5/6	3.70	3.65	2.10	0.07	#	723	#	10BG 7/6	4.00	3.40	1.75	0.03	#
650	#	10BG 7/6	4.15	3.95	1.75	0.05	#	724	#	2.5 B 5/6	3.90	3.60	1.80	0.04	#
651	#	10BG 5/6	3.50	3.40	2.00	0.04	#	725	#	10BG 6/6	3.80	3.75	2.70	0.05	#
652	#	10BG 7/6	3.80	3.40	1.30	0.04	#	726	#	#	4.15	3.75	2.20	0.03	#
653	#	10BG 6/6	3.25	3.15	1.45	0.03	#	727	#	#	4.00	3.50	2.20	0.03	#
654	#	10BG 5/6	4.20	4.10	3.00	0.08	#	728	#	10BG 7/6	3.80	3.70	2.30	0.05	#
655	#	2.5 B 6/6	4.05	4.10	2.10	0.06	#	729	#	10BG 5/6	3.40	3.35	2.60	0.04	#
656	#	10BG 7/6	4.40	4.15	1.25	0.06	#	730	#	10BG 5/6	3.20	3.00	2.00	0.03	#
657	#	10BG 5/6	4.15	3.75	2.10	0.06	#	731	#	#	3.70	3.40	2.00	0.03	#
658	#	10BG 7/6	3.65	3.60	1.60	0.02	#	732	#	#	3.20	3.10	1.95	0.03	#
659	L.G.	5 G 6/6	4.00	3.90	1.60	0.02	#	733	L.G.	5 G 5/6	4.35	4.25	1.55	0.05	#
660	B	10BG 6/6	3.65	3.60	2.40	0.03	#	734	#	2.5BG 6/6	3.60	3.40	2.55	0.03	#
661	#	#	3.70	3.55	1.50	0.02	#	735	#	5BG 7/4	3.50	3.00	1.00	0.01	#
662	#	#	3.60	3.50	1.40	0.02	#	-	B	10BG 6/6	-	-	-	-	#
663	#	10BG 5/6	3.20	3.15	3.00	0.03	#	-	#	-	-	-	-	-	#
664	#	10BG 6/6	4.30	4.25	2.00	0.05	#	-	#	10BG 7/6	-	-	-	-	#
665	#	10BG 5/6	4.75	4.40	1.95	0.05	#	-	L.G.	5GY 7/6	-	-	-	-	#
666	#	10BG 7/6	4.00	3.90	2.00	0.04	#	-	#	-	-	-	-	-	#
667	#	#	3.85	3.55	2.75	0.06	#	-	#	5 G 6/6	-	-	-	-	#
668	#	2.5 B 7/6	4.15	3.65	2.10	0.05	#	736	B	2.5 B 6/6	3.30	3.25	1.25	0.03	土壤 4
669	#	10BG 6/6	3.95	3.80	2.00	0.05	#	737	#	10BG 6/6	3.80	3.20	1.75	0.05	土壤 5
670	#	2.5 B 6/6	4.00	3.40	2.10	0.03	#	738	#	5 B 6/6	3.90	3.50	1.40	0.05	土壤 6
671	#	10BG 7/6	3.65	3.20	1.25	0.03	#								
672	#	#	3.30	3.05	1.40	0.04	#								
673	#	#	3.45	3.15	1.70	0.03	#								
674	#	10BG 5/6	4.55	4.20	2.30	0.07	#								
675	#	10BG 6/6	3.90	3.70	2.75	0.07	#								
676	#	#	4.50	4.10	1.40	0.05	#								
677	#	#	3.80	3.60	2.20	0.04	#								
678	#	10BG 5/6	3.95	3.70	2.30	0.05	#								
679	#	10BG 7/6	3.50	3.40	2.10	0.05	#								
680	#	10BG 6/6	3.60	3.20	2.35	0.05	#								
681	#	2.5 B 6/6	3.20	3.20	2.30	0.03	#								
682	#	10BG 6/6	3.55	3.10	2.00	0.03	#								
683	#	10BG 7/6	3.30	2.80	1.40	0.02	#								
684	#	10BG 6/6	4.45	4.20	2.10	0.05	#								
685	#	5BG 6/6	3.90	3.85	2.00	0.05	#								
686	#	#	3.75	3.30	1.75	0.03	#								

第4節 赤色顔料

今回扱った、未報告遺物の中には、赤色顔料を含む土塊が少量ながら混じっている。このうちには僅かにガラス製小玉を包含するものがあった。赤色顔料は、粒状になった大きいものでも径2mm以下で、ほとんどは土の表面に振り撒かれたように染み込んでいる。このため計量することはできなかったが、全量でも10数gに過ぎないであろう。

報告書による発掘調査時の所見では、赤色顔料は、石室内の「遺骸の腰の部分とみなされるところ」に「大体20cmぐらいの広さにわたって存した」とされている。また石室内から出土した鏡（四獸紋鏡）にも、赤色顔料の痕跡があった。これらのことから推測すると、今回扱った赤色顔料も、同様の部分から採取されたのであろう。

赤色顔料の成分であるが、森義直氏（松本深志高校講師）に鑑定を依頼したところ、次のような結果を得た。即ち、顔料に炭酸ナトリウム (Na_2CO_3) を加え、閉管中で強熱したところ、水銀粒が多量に壁面に付着した。従って、当該資料は比較的良質な水銀朱：辰砂（硫化水銀： HgS ）であることは間違いない。

第3章 まとめと課題

今回の弘法山古墳出土遺物の整理を通じて、明らかになったことや今後の課題について簡単にまとめてみたい。

まず土器についてであるが、要点は以下のように集約される。第一に、器種組成が從来から言われていた器台形土器（以下、器台と略称。他も同じ）、壺、碗を含まず、壺、小型高杯、高杯、手焙りの4器種から構成されること。第二に、器種間を越えて胎土、焼成の類似する群が見られること。第三は、從来からの指摘通り、いずれの器種も東海地方西部や畿内の影響が形態・紋様に色濃く現れていること。第四には、それらの地域の土器の年代比定に当てはめると、弘法山古墳出土土器群の所産は、少なくとも4世紀初頭に遡ること、などである。これらの事項に基づき、弘法山古墳そのものの築造時期や出現背景の検討、後方部墳頂での土器祭式の復元などが今後の課題となっていくであろう。

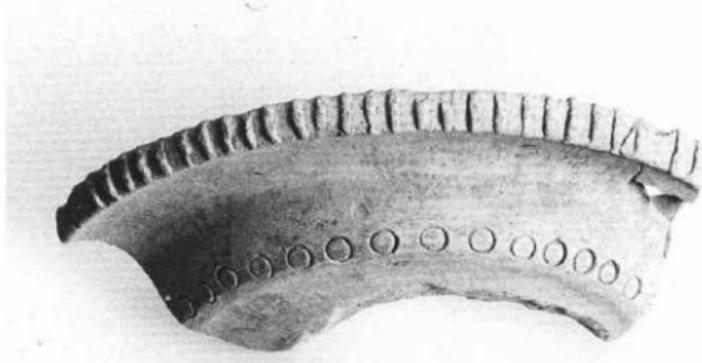
ガラス製小玉は、石室内の遺骸の頭部から胸部・腰部と推定される周辺より出土しており、堅くしまった土塊を粉碎してフライにかけて分別したので、報告書記載のごとく正確に頭飾り・手首飾りの数量を表すものではない。これらは本文（第2章第3節）にあるごとく、再整理と属性分析や製作技術の復元などの見直しが、今後の課題となろう。



壺B(第3図2)今回、新たに整理されたもの



同上部分(口縁部・頸部)口縁上段の山形波状紋、下段の円形浮文



壺C(第3図5)側面 口縁端部側面の細かい棒状浮文、稜部の円形刺突



同上正面(上から) 口縁内面端部にもひとまわり小さい円形刺突



高杯A(第4図1)杯部は今回、新たに整理されたもの



同上部分(脚部内面) 端部がわずかに肥厚内折れ

第3図版



高杯B(第4図3) 杯部と脚部の接合は今回の整理で確認



高杯B(第4図4) 杯部は今回、新たに確認さてたもの

第4図版

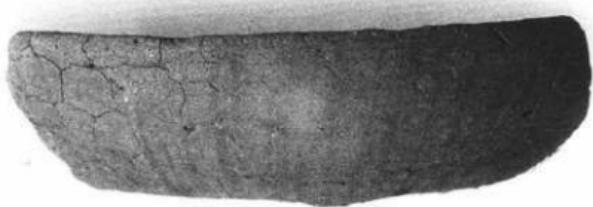


高杯C(第4図6)既報、脚端が外反するのはこの1点のみ



小型高杯B(第5図4)脚部、今回の整理で端部まで確認

第5図版



小型高杯 A(第5図1) 杯部、下の写真的脚部と同一個体と推定



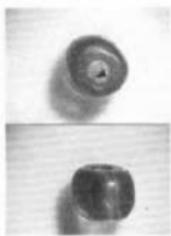
小型高杯 A(第5図2) 脚部、今回の整理で端部まで確認



手培形土器(第5図10) 鉢部、左側の突起から面部が立ち上がる



同上覆部破片下部の稜が鉢部の口縁に相当



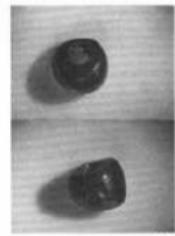
448



551



628



633



704



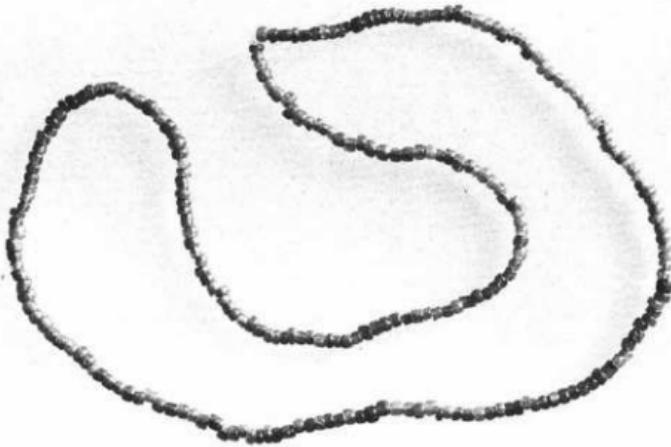
706



555



608



ガラス製小玉

第8図版

松本市文化財調査報告 No.111

弘法山古墳出土遺物の再整理

平成5年3月22日 印刷

平成5年3月22日 発行

編集 松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7
TEL 0253 34-3000

発行 松本市教育委員会
印刷 アサカワ印刷株式会社

